

Letting Students Ask and Answer the Questions : A Look at Two Types of Inquiry-based Literature Classrooms(Part 2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 米塚, 真治 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6475

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



学生の質問をベースにした「文学」授業運営の実践2

——「学生が答える」篇——

米 塚 真 治

2章「学生が答える」

(1) 前提

本稿は、筆者が行った講義と演習の事例分析を通して、「文学」の授業運営における inquiry-based learning の有効性を、おもに受講者の関心の喚起と予備知識の活用という観点から検討することを目的としている。前号に掲載した第1章では、講義内容について「学生が問い、教師が答える」という授業運営方法を扱った。事例として、アメリカ文学・芸術の講義の2015年度後期中間テストで受講者たちが教師に宛てて書いた質問と、筆者がフィードバックした回答とを採り上げた。

今回の第2章は、読んだテキストについて「学生が問い、学生が答える」という授業運営方法を扱う。この自律的な授業運営方法は、inquiry-based learning の導入段階において最終段階に当たる（はずの）ものだ。

序論で提示したことの繰り返しとなるが、主に採り上げる事例としては、2015年度後期（第1章の事例と同時期）にアメリカ文学の演習で短編一編を読了するごとに「課題」として受講者から集めた「問い」、および、それらの中から受講者自身が選んで「回答」したものを用いる。

「演習」は「アメリカ文化研究（文学）」という科目名称で、本稿で取り扱う同2015年度後期には、日系アメリカ人作家たちによる短編を集めた語学教材¹収録の6編の中から4編を選び、原書講読を行った。この授業計画を立てるにあたり、「比較文化」という学部の方法論を考慮していたのはもちろんだが、それ以外に授業の性質に関して筆者が念頭に置いていたのは、主に次の要素である。

1. 演習受講者は30名強と見込まれ（実際、30名だった）、ゼミのように受講生の大部分を巻き込んで議論する形は困難と思われた。人数や教室サイズ、学生同士の関係性から見て、教員と担当の学生が質疑応答することは容易だが、自発的な意見表明に期待することや、指名して発言させることを多用することには限界がある、微妙な距離感である。したがって1章の講義と同じように、コメント回収・紹介による擬似的なやりとりを併用する必要があると思われた。

2. 選択必修科目であり、学生はある程度は自発的に選択しているものの、履修要件と時間

割との兼ね合いによる選択が多い。序論で述べたように、映画や音楽に比べ、「文学」に元から知識や関心を持つ学生は当学部には少ない。したがって、研究書などの二次資料を素材にすることは難しい。逆に言えば、先行研究の多寡はあまり関係しないので、無名作家の書いた一次資料を素材にしてもよいということになる。

3.英語圏に短期から半年程度の留学経験者は、五人に一人程度はいるが、全体として英語の語学力は高くない。これも「文章の英語」で書かれた二次資料を扱いにくい理由となる。内容把握を前提としていきなり議論から始めることや、内容要約をさせることは難しく、逐次的訳読による内容把握を第一にせざるを得ない²。

4.当大学として、入学者の選抜を前提に研究・教育機関としての「エクセレンス」を目指すものではなく、寛大な入学許可を前提に、「今ここ」にいる個々の学生をいかに伸ばすかを重視する志向を持っている。筆者の意思としても、「目の前の学生さんを地道に指導してちょっとでも『根拠を持って論理的にモノを言えるようにする』」³ことを目標にしたい。そのためにも、学生個々の意見形成のためにある程度の時間を与え、それぞれの見解を文章として筆記させ、可視化させることが有益だと思われた。

(2) 方法とその理由

序論で述べたように、この第2章の実践は、第54回日本アメリカ文学会全国大会で行われたワークショップ“Teaching American Literature in English”におけるマイケル・プロンコ (Michael Pronko) の報告⁴に触発されている。彼の提示した方法論を、前節で述べた諸前提を踏まえ、モディファイして実践したのが、本稿の試みということになる。

東京と日本文化に関するプロンコのユーモア溢れるエッセイに筆者は親しんできたが、彼は明治学院大学文学部英文学科でアメリカ文化を講じる教員でもある。学会プログラムで見た発表要旨は以下のように要約できるものだった。

- ・質問を授業の柱に据えることは、学生が英語を能動的に使用するだけでなく、文学作品を広く深く読む動機付けになる。
- ・学生が自分自身の考えを述べ、文学作品との自律的な関係を築くのに役立つ（語学力が低い場合でも）。
- ・本発表では、質問の実例を示し、質問を行うことと質問に答えることを導く技法を論じる。

この要旨を読んで筆者は、英文科の大学院出身者の多くが馴染みであろう、「工事中」の表紙⁵を連想した。あのCliffsNotesのように、あらかじめ与えた質問を念頭に置いて読み進めさせる、もしくは読んだ後で質問に答えさせることで、作品を多角的に捉えさせようとする狙いだらう。それなら筆者もやっている。しかも市販教材ではなく、自分のオリジナル問題で。

だが実際の報告は予想と異なり、以下のように要約できるものだった。

- ・学生に問いを作らせる（もちろん、英語で）。彼らの問いが教科書となる。
- ・それは彼らの自己表現ともなる。
- ・問いを発するには深く読む必要があるので、深く読む動機付けになる。
- ・学生は、より難しい質問を真似て伸びる傾向がある。
- ・単純すぎる質問が出ることもあるが、「そんなことさえわかっていない」のは、教師が自身の説明不足に気づく機会ともなる。
- ・進むペースは落ちるが、皆が全体として伸びるメリットのほうが、より重要である。
- ・「問い」の量が十分あるなら、回答の際に「わからない」や「パス」を許容し、学生の不安を減らすことが必要。
- ・「共有された無理解」には意味がある。
- ・「私は答えられた」と「私は答えられなかった」とを合わせて、「我々が答えられた」となる。そこに民主主義と連帯が生まれる。

「エクセレンス」を目指す教育機関であれば、上記に対しては異なる結論や対処が導かれるかもしれない。後半の対処には、「リーダーシップ」や「効率」などの観点から異論が出るだろう。しかし筆者の教育観に照らして、これらの主張は大いに共感できるものだった。

続けてプロンコは、授業運営の指針とすべき本としてMichael J. Marquardt著*Leading with Questions*⁶を挙げた。そして、学生が問いを発する前に、モデルとなる問いを提示しておくことなど実践上のコツ、質問と回答の実例などを紹介した。「モデルとなる問い」とは、たとえば登場人物、葛藤、設定、アイロニー、理論（ジェンダーなど）、また扱うのが映像であれば編集、音響など、学生にとって「目の付け所」のヒントとなるような問いだという。

また、参加者との質疑応答の中でプロンコは

- ・その日にわからせなくてもよい。授業内ですべての疑問を解消しなければならない、と日本の教師は心配しすぎである

と指摘した。

筆者の勤務する大学もご多分に漏れず「学修時間の確保」の観点から自習を重視しており、授業支援ウェブサイトも科目ごとに開設されているので、授業外の自習時間を活用することは容易だった。また、モデルの提示に関しては、同じ演習の前期は「教師が問い、学生が答える」形でやってきたので、これがすでにモデルとして利用できると思われた⁷。

ただし筆者の授業は英語英文科の授業ではなく、前述したように語学力の制限も大きいいため、質疑応答は母語の日本語によらざるを得ない。その他にもモディファイすべき点は

あるだろうが、方法への関心・共感と、環境面の利点があり、現在進行中の授業でさっそく実践してみようと考えたしだいである。

このほか、「英会話」の要素が強いこのような授業を、どうやって英文科の卒業論文につなげていっているのか、という参加者の質問に対して、プロンコは、三年次には「事実に関する問い」と「意味に関する問い」とを切り分ける練習、「議論のための問い」を出させる練習をし、四年次の卒業論文もQ&Aの形で書かせている、と回答していた。しかし筆者の今回の取り組みは、期間の短さもあり、卒業論文を含むアカデミック・ライティングに十分反映させられたとは言えない。(4) 方法の評価において、この問題を反映した新たな指導案とともに述べる。

(3) 質問と回答

後期の演習で最初に読んでいたのは、児童文学と強制収容所体験記の作家として知られるヨシコ・ウチダ⁸の短編“Uncle Kanda’s Black Cat” (1981) だった。歴史的な大事件を背景に小さな個人の生活を描く、正統的なリアリズムが、ウチダの児童文学の持ち味と見られるが、この作品も例外ではない。日米開戦前夜と思しき時代、日系人を含む近隣の人々から確たる理由もなく脅威と見なされている貧困層の男性（日系アメリカ人一世の独居老人）を描いている。視点人物である近隣の日系人少女が当初感じた嫌悪と恐怖は、最終的には理解と同情に変わってゆく。作者の意図は、このような転換を通じて、偏見の対象となってきた日系アメリカ人への読者の理解を、効果的に獲得したいということにあったようだ。作中で、他の米国人からは非人道の象徴とみなされたピクチャーブライド（写真花嫁）のエピソードをあえて採り上げるのも、同様な意図だったと思われる⁹。同時に、一世に対する二世の批判から比較的自由な、しかし知識の少ない若い日系三世の読者も、十分に意識していたと思われる。

ヤングアダルト向けと思われる本作の筋立てや文章は平易であり、そのことは結果として、読者である学生自身が「能動的な読み」を発動する上でプラスに働いたようだ。マイノリティが周囲の無理解ゆえに脅威（ここでは魔法使い）と見なされ、忌避・排除される様子も、2010年代現在の時点で読み直す意義を持っている。

この作品を素材に inquiry-based learning の実践を始める際に、筆者が念頭に置いていた課題は、主に二点である。

- ・教師による「問いのモデル」提示という前述の手段（プロンコ）をいかにを限定的かつ効果的に用いながら、学生たちによる自律的な問題提起と回答のサイクルを起動させるか
- ・教師による「評価」という手段を、いかに限定的かつ効果的に用いるか

後者は筆者なりの方法論であり、それが有効だろうという予測は、本稿1章で扱った講義からのフィードバックに基づいていた。

日曜の学会ワークショップから戻って三日後、ちょうど作品本文の訳読を終えた回で、筆者は受講者一人一人から「問い」を提出してもらうことにした。（訳読の最中には、全体をおおまかに区切り、「ここは●●を描いたシーン」という構成を頭に入れてもらうようにしたが、分担者に対して細部が含意するものを細かく尋ねることはしていなかった。結果として、このことは、テキストの一見平易でなめらかな表面にひびが入って「問い」が生じる際の衝撃を、受講者に体験させるのに役立ったと思われる。）

集めるに先立って、筆者は以下のような「問いのモデル」をあらかじめ板書した。

- a. 子供の眼から見ている理由
- b. カンダさんは、なぜ花〔婚約者の遺影に供えた花〕を枯らしたままに？
- c. カンダさんはふだん、この女性〔渡米後一週間で病死した婚約者〕を忘れていた？
- d. これは何年ごろの話？ どこから判断？
- e. 黒猫はどんな役割を果たしているか？

これらを見ながら、自分の「問い」を思い思いに三つずつ書いて提出してもらった。「問い」は授業中に回収し、連番を振り、記入者の氏名を伏せて、授業支援システムのサイトに当日中にアップロードした。

受講者はその中から自分が答えたい「問い」を三つ選び、翌週の授業にその回答を提出することを求められた。答える「問い」を選べるシステムは、プロンコの提案でいう「パス」「わかりません」を、筆記形式のメリットを生かして、より生産的な方向に拡張した実践といえる。

また、自分が提出した「問い」に、マッチポンプのように自分で答えてもよいが、他人の「問い」に答えることを標準とした。他人の「問い」に答えることは、プロンコの提案にいう「民主主義と連帯」とつながる。彼の提案では、「理解」や解決がもたらす共同体が評価されているように見える（これは、彼が課題解決型のアクション・ラーニングをベースにしていることと無縁ではないだろう）。ただし、筆者の意図はやや異なる。筆者の考える知的共同体は「問い」と議論によってもたらされる。問いに自分自身で答えなくてもよい、他人に答えさせてよい。それはすなわち、自分自身ではただちに答えられない種類の問いを、他人への信頼に基づいて、他人に向かって発して良い——というより、そういう問いこそが発すべき問いであり、学問の契機である。そのようなことを、筆者は学生たちに理解してもらいたかった。

上記の大目標から導かれた第一の目標は、なるべく「いい問い」を発することを、学生に意識してもらうことだった。そのために翌週の授業で筆者は、「回答」を集めた後、次回作品の訳読に入る前に、受講者から集めた「問い」の「評価」を行った。

高評価を与えて教室で紹介したのは、以下のような「問い」である（連番となっている

箇所はおおむね、同一の学生が出した問いであることを示している)。「問いのモデル」との類似や重複は、あえて問題にしていない。

5. カンダさんはなぜリンコの新しい服に興味を示したのか？
6. なぜいつもは閉まっているドアが開いている日があったのか？
18. カンダさんは亡くなった女性をどう思いながらすごしてきたのか？他の人と結婚しようと思わなかった？
19. カンダさんが心を開いていっているのと、ネコがなつきはじめているのは比例している？シーンの。
23. 婚約者を亡くし孤独だったカンダさんはRinkoのどういったところに親しみを感じ、話しを聞いたりネコをあずけようと思ったのか。
25. カンダさんはなぜリンコのドレス姿を見たいと言ったのか。結局見せることはできたのか
27. なんで題名がUncle Kanda's Black Catなのか。
28. 最初の文と最後の文が同じだがどのような意味があるのか。(最初と最後で文の意味合いは違うのか、それとも同じなのか。)
30. どのような出来事からカンダさんへの気持ちが変化したのか？
33. リンコが食べ物を持っていた(ママ)時の食べ物が日本食と洋食だったのはなぜか？日系だったから？
35. どうして、リンコの母親は、自分ではなく、リンコにカンダさんの所に行かせたのか。
36. どうしてマリーゴールドの花だったのか。
38. リンコがカンダさんと親しくなったことで、近所の子供たちの誤解はとけたのか。
42. 黒猫であったことに意味はあるか？(Uncle Kanda's Catではダメだったのか？)
44. なぜカンダさんが飼っていたネコは“黒猫”だったのか。“黒”じゃなくて“白”や“その他の色”ではないのはなぜ
47. なぜカンダさんはリンコに「ドレスを着ている所をいつか見せてほしい」と言ったか

筆者はこの日、これらをなぜ「いい問い」と評価するのか、理由を明示しなかった。「興味深い」「難しい」「考えたい」といった感想を繰り返したただけである。教師が「いい問い」と称するものを例示し、「いい問い」の存在を学生に意識させることが、まずは重要であると考えられた。

その次の回で、筆者は前回集めた「回答」について「評価」を行った。前述したように「エクセレンス」を目指すものではないから、筆者は回答の選抜にあたり、優秀さのみを重視したわけではない。たしかに中には他の学生たちに刺激を与えるような、優れた調査能力や分析力を示す回答もいくつかあった。たとえば次のようなものである。(矢印以下は筆者が教室で紹介する際に付けたコメントを示す。)

42. (黒猫である意味) への回答

黒猫のみの純血種であるボンベイという品種が存在していると調べて分かったのだが、その原産国はアメリカらしい。しかし、欧米では、昔、不吉の象徴とする迷信があり、黒猫というだけで殺されるということが起きていた。この時代、日本人がアメリカにいと、アメリカに忠誠を誓って強制収容所から軍隊に入っても、迫害されたりしていた。この黒猫は、アメリカ生まれ（この話に出てくる黒猫がボンベイという種であるかは分からないが、元をたどればそう）だが、嫌われて、意味もなく殺され、一方でアメリカに渡った日本人はアメリカ人になろうとしても嫌われていた。その、アメリカという地で嫌われていた時があったという共通点から、猫は猫でも「黒」猫にしたのではないかと思った。

→よく調査しましたね。ただし「アメリカ生まれ」なら二世のはずだけれど、カンダさんは日本生まれの一世なんですね。そのずれを埋める必要はあるかもしれない。もしかして猫は、産まれるはずだった二世の子供の代わりとか？

そもそも猫は、人に馴れない、気まぐれ、という点でカンダさん本人と共通する。そして黒猫は、『魔女の宅急便』みたいに魔法使いと一緒に描かれ、外見だけで差別されるという不利益を被っている。これもカンダさんと共通し、「分身」にふさわしい。そういう一般論から語り起こすと、さらによかったんじゃないかな。

36. (マリーゴールドを供える意味) への回答

マリーゴールドには様々な花言葉がありますが、「悲しみ」や「変わらぬ愛」という意味が中にはある。写真の女性を失った「悲しみ」、亡くなってもその女性を愛し続ける「変わらぬ愛」という意味でマリーゴールドなのではないかと思う。又、マリーゴールドからヘレニエンという成分がとれるらしいが、それを有効成分としたアダプチノールという薬が作られ、今でもこの薬は目の薬として使われている。おじさんは目が悪かったので、その関連もあるのではないかと思う。マリーゴールドは「聖母マリアの黄金の花」という意があるので、教会とマリア様という点での関連もあるのではないかと思う。

→花言葉の調べは的確ですし、目薬の指摘もおもしろいですね。実際にどう「関連」させられるかは難しいですが。

カンダさんはリンコの両親同様、ときどき教会に通っていますから、マリアの関連も疑いない。ただし、もう一步。結ばれる前に病死した写真花嫁なので、「処女マリア」に触れたいところだったよね。作者の両親は同志社大卒の熱心なクリスチャンで、作者は幼い頃から教会に通っていたという情報、そして母親も写真花嫁だったという情報も、ついでに提供しておきます。

しかし、筆者が紹介したのは必ずしも優れた回答ばかりではなく、たとえば次のような、比較的平凡な回答も紹介した。

19. (カンダさんの心とネコのなつき方) への回答

比例しているのは、Rinkoとカンダさんとの関係とRinkoの猫に対する価値観（以前はあまり好きではなかったが、今では好感を持っている）だと思う。

→前者は結局、問いと同じことになると思うのだけど、後者の指摘は重要だね。つまり、ネコがなつくというより、リンコの側の問題だ、という指摘だよ。カンダさんが心を開くのもその結果だろうね。

質問にイエスと答えて根拠を示す以外にも、質問を修正したり、反論したり、前提を疑ったりすることも重要だね。

27. (題名の意味) への回答

この小説の初めが最後の小さな夢を見ているかのごとく〜と同じで猫のことを言っていて、最初から最後までこのカンダさんの黒猫がキーになって物語が成り立っているから。

→これは質問者と回答者が同一なのだけれど、作品の「形式」に注目した問いということだよ。こういう質問は成り立つよね。ついでに28. (文の意味は同じか) にも回答してほしいけれども。

筆者が最も重視したのは、前回「いい問い」と評価した質問に対する回答を、優先的に紹介することだった。それによって、紹介した回答の多くが「いい問い」から出ていることを学生に印象づける狙いがあった。筆者はここで、以下のようなテーゼを受講生に提示した。

・「いい問い」とは、まず、回答者に選ばれる問いだといえる。

次に、もうひとつのテーゼを提示した。

・「さらに良い問い」とは、いい回答を導く問いである。

それから筆者は、第二の目標として、「いい問い」の条件を検討することに移った。

筆者はまず、前述の42. (黒猫である意味) と36. (マリーゴールドを供える意味) への回答がそれぞれ優れたものとなった理由を検討した。あれは、単に回答者の能力が優れて

ただけだろうか？ 優れた「問い」こそが、優れた回答を引き出したのではないだろうか？ そう言って、36.「どうしてマリーゴールドの花だったのか」という問いと、8.「カンダさんが、女性の写真に枯れてしまったが花を供えていたのはなぜか」という問いとを比較し、内容には共通点があるものの、前者36.の問いの方がより焦点が絞られていることに、注意を向けさせた。

同様に、42.および44.の問いと、27.の問い「なんで題名がUncle Kanda's Black Catなのか」¹⁰を比較した。そして、前者42.と44.が「(Uncle Kanda's Catではダメだったのか?)」 「“黒”じゃなくて“白”や“その他の色”ではないのはなぜ」という限定をかけることによって、27.に比べ、回答者の調査能力や分析力をピンポイントで引き出せた可能性を指摘した。

筆者は続けて、前回特に採り上げて評価しなかった「問い」に対する回答も、いくつか紹介し、コメントを加えた。そこで主に採り上げたのは、上記のような問いとは対照的に、回答者の能力を制限してしまう問いの例だった。

43.「なぜリンコはカンダさんの事を最初すごく嫌っていたのか。(見た目で怖いのは分かるが、親に言われるまで自分から訪ねて中面(ママ)はどういう人か確かめたいと思わなかったか)」への回答

見た目の恐さから、近所の子どもたちの間でも、呪いをかけることができると恐れられていた。リンコも、弟や他の子どもたちと同じように、おじさんのことが恐くて嫌いだったが、おじさんと話していくうちに、おじさんが普通の人だと分かり、徐々に仲良くなっていく。

→「見た目の恐さ」以外は回答になっていなくて、そして「見た目で怖い」ことは質問で既に触れられているのだから、これは回答になっていないんだよね。せめて、「目が悪かったから、やぶにらみに見えた」とか、そのぐらひは考えて書いてみよう。

こうなった理由の一部は質問にもあって、この質問は一見疑問形で終わっていても、回答の方向性を制限しすぎていると思うんだ。質問がピンポイントであることと、回答者を誘導することとは同一ではないと思うんだよね。

26.の問いも見てみよう。「最初のころはカンダさんを嫌っていたリンコだったが、パパとママがカンダさんに優しくしていた所を見て多少カンダさんに対してのイメージは変わったのか」。この場合も、答えがイエスであれば、回答者が付け加えるべきことは、もうあまり残っていないね。誘導する、方向性を制限するというのは、そういうことさ。別の言い方をすれば、これらは質問者の中ですでにある程度答えが出ていることを、確認しているということだよ。こういうのは、コメントとしては優れていたとしても、問いとしては優れているとは言えない。

その場合は、「自分はこう思うけれども、○○という点についての解釈しだいでと思う

ので、他の人の意見も聞きたい」というように、「確認」であることを明示したうえで、さっき言った「ピンポイント」と組み合わせて、異論に対してオープンにするというか、異論を誘発するような訊き方をしてみたいよね。

筆者はさらに、学生の「問い」と「回答」を次回に向けての「モデルとなる問い」代わりに利用できるよう、プロンコの言う「理論」的な要素を拾いながら、評価と解説を続けた。

48. 「なぜカンダさんは食事をとらなかつたり、部屋をキレイにしないような、生活性（ママ）のない暮らしをしていたのか」への回答

生活感のない生活を送っていたのは、現代の男性の一人暮らしとは違ってこの時代の男性は、1人で生活＝家事をすることが出来なかったからだと考える。この時代の社会は、男性が外で働き、女性が家事をすることがあたりまえであったため、カンダさんにはパートナーである女性がいなかったため、生活がひどいものとなっていたのだと考える。

→ジェンダー・ロールに着目したわけだね。これは有効な視点だね。ちなみに強制収容所に入れられた際、女性たちの暮らしは楽になった側面さえあると言うよ。

さらに言えば、イントロで話したように日系人の間には、資金を持って移住してきたビジネスマンと労働者層との階級差があり、反目が生じていたのだけれど、両方が収容所に入れられた際に緩和されたのだという。みな資産を奪われたのだからね。その際、食うのにも困っていた下の方は、食事の心配も無くなり、生活が楽になった面さえあるそうだ。彼らは解放された後、却って苦しくなったらしい。カンダさんの境遇を考えるには、そういう階級的な要素も無視できないね。

あとは人種的偏見だね。「アジア系は勤勉」という評価の一方、だらしないとか道義的に問題があるというステレオタイプも白人の間に根強くあって、作者がその偏見を戦略的に組み込んだということだよ。あとで病気や貧困という事情を明かして、読者の見方を揺さぶることができるように。

筆者はさらに問いと回答を紹介し、比較的自由なコメントを加え、「いい問い」への道筋を示すことに努めた。

2. 「ねこの名前の由来は何か？」への回答

Issa = 小林一茶のこと。文中に、日本の有名な俳人からとった名前だと書いてある。はじめ、小林一茶が猫についての句をよんでいたからかと思ったが、貧農の子として薄幸な運命とたたかい続け、弱者に対する限りないいつくしみと同情、世相に対する痛烈な風刺、

あるいは自嘲や自虐を表現する小林一茶の境遇をカンダおじさんに重ねている。また、一茶が表現したものの象徴的な意味がISSAの名前にこめられている。

→いい調査ですね。確かにそれぞれの要素が一致しますね。一茶と言えば「やせがえる負けるな一茶ここにあり」の句が一番知られていて、そしてカンダさんは端的に飢えて痩せていて、教会婦人部のチャリティに参加しているリンコの母親から食事を運んでもらっているんだよね。そういう具体例も入れると、さらによかったかな。

最後の「象徴的な意味」って何だろう？「また」と言うからには別の要素なんだよね。思わせぶりは避けたいかな。

8.「カンダさんが、女性の写真に枯れてしまったが花を供えていたのはなぜか」39.「カンダさんは写真の女性を妻として愛していたのか」および27.（題名の意味）への回答

19世紀後半にカンダさんは労働目的で移民としてアメリカに渡ってきた日系一世の男性であろう。このことはフルーツを摘んだり、裕福な白人の家のフロアを掃除していた、若いときは元気に動いていた（働いていた）ことから想像できる。そして写真の女性は写真花嫁で、カンダさんと彼女は恋愛結婚ではない。結婚する前に彼女が亡くなったということは、初めて会って間もないうちに亡くなったかもしれない。だからカンダさんは妻として愛していたかといえはそうでないと考えられる。枯れた花は、カンダさんが亡くなった彼女にお悔やみの形として供えたものではないだろうか。（毎日水を変えて（ママ）花を供えるほど思い入れが無かった、そこまで彼女を知らなかったから。）アメリカに一人で渡ってきたカンダさんは花嫁をもらうことができず、ずっと孤独で、唯一本当に親しみ大事にしていたのがネコだった。だからタイトルも最愛のネコにしたのだと考えられる。

→自分の書きたいように書く余地を確保するために、あまりピンポイントでない質問をあえて選択し、組み合わせたと見えますね。上級のテクニックです。構成もうまくできています。ただ、「問い」が希薄な分、発見も少ない。

ひとつ指摘すると、「枯れた花」は、象徴のレベルで、そうでなければならなかったと言えますよね。「開花」して実を結ぶ前に亡くなったのだから。

筆者はこの授業の最後に、

- ・いい問いとは、まず、回答者に選ばれる問いだといえる。

- ・さらに良い問いは、いい回答を導く問いである。

のテーゼを繰り返し、さらにもうひとつのテーゼ、

- ・最良の問いは、質問者自身が答えられなくても、知的共同体からいい回答を導き出す問いである。

を提示して結びとした。

続く回で筆者と学生たちは、同じ教材から、ワカコ・ヤマウチ“*And the Soul Shall Dance*” (1966) とヒサエ・ヤマモト“*The Streaming Tears*” (1966) を読み進めた。

舞台（戯曲版）でも有名な前者では、恋人と引き離され、歌手の夢を断念させられて、亡くなった姉の夫の元に海を越えて嫁がされ、心を病んでゆく女性を、近隣の少女の視点から描く。抑圧された女性の情念や、視覚的な喚起力に富んだ描写に反応して、学生たちはそれぞれに感受性豊かなコメントを寄せていた。

桧原美恵が指摘するように、「沈黙」する一世の内面や過去を、作家の分身とおぼしき二世の少女が推し量るのは、日系アメリカ文学によく見られるパターンで、“*Uncle Kanda's Black Cat*” とともにこの“*And the Soul Shall Dance*” も当てはまる。加えて本作は、桧原が指摘するように、娘が母親（の世代）の「セクシュアリティにまつわる心の懊悩を推し量る」作品群のひとつである¹¹。今回は「問い」と「回答」形式のレスポンスペーパーをあまりとらなかったのだが、提出されたコメントの熱量を見て、セクシュアリティについてももう少し踏み込んでよかったかと悔やまれた。特に、夫婦の生活にどのような拘束と暴力が伴っていたのか、性的に成熟した義理の娘の訪米が夫婦にどのような影響をもたらしたのか、実の父と娘が本当にはどのような関係であったのか、腰が引けずに強く問いかけてもよかったかと思える（生々しさに遠慮していたのか、後二者については誰もコメントすることはなかった）。

戦後アメリカ文学屈指の短編の名手といえる著者による後者は、代表作品集 *Seventeen Syllables and Other Stories* (1988) には収められていないが、なかなかの佳品である。人種のステレオタイプを効果的に用いつつ、半径数メートルの情景からアメリカ社会や歴史の有り様を描き出す著者の手腕と勇気が、存分に発揮された作品といえる。「戦争が終わり、ロサンゼルスに帰ってきたばかり」の日系アメリカ人男性が街頭で、そして移住先のラスベガスの街頭でも、異なったエスニックの人々に次々と声をかけられ、負の感情を露わにされる。主人公の奇妙な無反応が、あたかも「鏡」のような役割を果たし、彼ら自身のトラウマ（戦争や人種差別に起因する）が映し出されてゆく。

ヤマモトは黒人新聞に勤務したことがあり、夫はスペイン系の船員だった。複数のエスニックを絡ませる得意のパターンは、その経歴を反映している。牧野理英は加えて、本来異なる抑圧経験を「何か別のエスニック集団と安易に同一化」させようとする日系三世の活動家たちへの批判も、そこに見いだしている。また、強制収容という話題の回避や、子供の語り手に事態を「傍観」させることは、「生き残る術」として選択された「無抵抗の語り」なのだという。「国家に対して戦闘的に抗えば、最終的には不満分子である自分たち自身が殲滅される危険がある」ことを示すというのだ¹²。

inquiry-based learning に好適の素材と思われたので、筆者は訳読の際、各担当者に「問い」

を「モデル」として投げかけてみた。「そういう人にはあまり反応しない方がいいのさ」と主人公は言うが、実際には出会う人々は一種類ではない。人々の間に共通点があるとするれば、どこだろう？「反応しない」ことのメリットは何だろう？ 黒人男性が日系人男性に絡んできたのはなぜだろうか？ 大柄なその彼を、女性店員が叱って出て行かせたのは確かに「いい話」だけれども、それを可能にした背景は何だっただろうか？

その場でおおむね「回答」は返ってきたけれども、その後、その回答（トラウマ、沈黙、エスニシティ）に関わる主題について、学生たちがレスポンスペーパーやレポートであまり言及することはなかった。学生たちのコメントは、今日の軍用ドローンを予告するような結末部の無人爆撃機構想に集中していた（つまり、作中に明示されている要素に集中したと見なせよう）。次に数が多かったのは、戦争と原爆投下を巡る「日本」と「米国」との関係に関するコメントで、その狭間にあるはずの「日系アメリカ人」の存在にフォーカスしたコメントは少なかった。

後期の授業初回のイントロダクションでは、すずきじゅんいちのドキュメンタリー映画『東洋宮武が覗いた時代』（2008）の場面をいくつか視聴し、強制収容に対する日系人の無抵抗や、強制収容と9.11以降のムスリムへの偏見との相関について考える素材を与えていたのだが、コメントでこれらのテーマに言及した学生はほとんどいなかった。「問い」の機会に、学生が持っている予備知識や関心を活用することはできるのだが、新たに与えた（身になっていない）知識を利用させようとするものの難しさを感じた。

ただし、語り手である娘の語りが不自然に中立的に感じられることについて、一人の学生から「問い」があった。その「回答」として、語り手の中立性と、わざと核心を外したり迂回したりする韜晦とが、主人公の無反応を補強しているのだという趣旨のコメントもあった。いずれも、明示的でないものにまで目を届かせた、優れた着眼であったと思う。（牧野理英の指摘は前述した通り。キンコック・チャンは、ヒサエ・ヤマモトの小説には「幾層もの沈黙」が書き込まれており、「一世の含みのある沈黙に対して二世の無邪気な視点を使う」ことで「隠されたプロットを構築」し、「サスペンス」をもたらすモダニスト的手法を利用していると指摘している¹³。）

最後に読んだのが、同じ教材に収録されているハワイの日系三世、ヴァイオレット・ハラダの短編“The Shell Gatherer”（1982）だった。この小品に対して、学生たちはなかなか堂に入ったQ&Aを展開していたので、最後にその様子を紹介したい。作家としてよりも、inquiry-based learning 専門の学者・教育者としてはるかに著名であるハラダ¹⁴は、自身のテキストを素材にした彼女たちの活動を見て満足するだろうか？

24. 「マニユエルの息子が死んだと話している時、彼[マニユエル]の様子は どうだったか？ また、どのような感情だったと思われるか？」への回答

戦争で死んでしまったという現実をつきつけられた悲しさ、自分が生きていることのかすかな喜び、自分が生きているということは何もできなかったというむなしさ、自慢されたように聞こえた悔しさ、など様々な感情が入り交じっていると思う。感情が多くて何も言葉にできなかった。

→繊細で的確な分析だね。さらに、後期のイントロで説明したような、日系とフィリピン系の地位や両者の関係も、考えなければいけないわけだけれど。

15. 「なぜ日本人も差別の対象になりうるのに、フィリピン人を差別するようで見ているのか」への回答

日本人も差別の対象になっていたからこそ、自分たちより下に見える（ママ）差別対象が必要であったのではないかと思う。生まれ育った日本を離れ、言葉の違う土地で暮らし、差別を受ける。以前立派な軍人〔日露戦争の将校〕であったおじいちゃんには屈辱的なことであり、自分の方が上の立場でいられるマニエルが自尊心を保つ存在であったのだと思う。

→個人の心理に即して、的確な分析だね。しかし、さらに言えば、アジアでのプレゼンスや領域の拡大を背景として、戦前・戦中の日本人が他のアジア諸国民に向けていた視線、それが日系一世の彼らにあっては敗戦後も継続しているように見えるのが、興味深いところだね。他の人が採り上げていた「バターン死の行軍」とか、あるいはマニラ市街戦での市民の犠牲とか、そういう蛮行が明らかになっても、影響を受けていないように見える。つまり、自分を「名誉白人」みたいな地位に置き、主流白人の偏見を「活用」して、他のアジア系住民を生来非道義的な存在と決めつける。これは、我々自身も顧みないといけない点だと思うね。

11. 「何故『貝』を選んだのか」への回答

「貝」は生きているときも静かで何を攻撃するわけでもなくひっそりとしている。死んで浜辺に流されると、それは小さくて派手さはないがきれいである。そのような貝にManuelの生き方を重ねたのかもしれない。

→貝の形態にも注目してみたいね。閉じた二枚貝であれば、「沈黙」「物言わぬ」といった言葉が思い浮かぶ。巻き貝であれば、形態が耳に似ているうえ、耳に貝を押し当てて海の声に耳を澄ます、といった図が思い浮かぶ。いずれにしても、マニエル自身の表象でもあり、海の向こうで戦死した息子の表象でもあり、というところだよな。

12. 「『porch』と多く出てきているが、彼らにとって「porch」とはどのような場所なのか」への回答

porchは、玄関であり、部屋への入り口でもあり、出口でもある。ここで祖父は旧友と「軍服を着ろ」といったり、旧友の息子が亡くなったことを聞いて悲しんだりしている。この玄関は、戦争への入り口と、「死」へと向かう人生の出口のようなものとして存在しているのではないかと思う。

→センスを感じさせる、いい問い、そして回答だね。一時的に立ち止まる場所、という要素も考慮したいけれど、この作品ではむしろ、ガゼボのように、とどまって外を眺める場所として機能しているようだ。その前を苦しげに通り過ぎるフィリピン人を、日系一世が傍観しているということだよね。いま朝鮮戦争が行われているという時代設定や、実際の執筆年代を考えると、朝鮮戦争やベトナム戦争で日本がアジアの人々に対して果たしていた役割に対する、なんらかの批判も読み取れないだろうか。

この場所には祖父の友人たちが集い、日本家屋の縁側と同じ役目を果たしている。縁側を、内と外のあいだの曖昧な領域と捉えれば、日系一世の立場と関連付けられるかもしれない。またポーチ自体は、アメリカ人読者には西部劇を連想させるだろう。加藤幹郎は、西部劇映画のポーチにはいつも白人の保安官がロッキングチェアに座り、よそ者を監視していると指摘している。「文明」と「野蛮」ないし「荒野」との境界線ということだ¹⁵。多様な読みのきっかけになりそうだね。

19. 「マニエルの息子が戦死したことをきいて祖父は少しでも彼を哀む（ママ）気持ちがあわなかったのだろうか」への回答

全く彼を哀む（ママ）気持ちがあわなかったわけではないはずだ。唇をふるわせていたのは、彼を哀む（ママ）気持ちと今まで見下してきた気持ちが祖父の中で葛藤があったからなのかなと思った。

→「葛藤」に注目するのは、シンプルだけれど、いつもよい手がかりになる。

同じく19.への回答

マニエル自身、なぐさめを期待しているわけではなく、また祖父もなぐさめはしなかった。しかし自分の孫も戦場で生活していたという共通の境遇もあり、少しは同情の気持ちもあったのではないかと思う。しかしそれ以上に祖父は“フィリピン人”が嫌いなので、それを表に出すことはしなかったのだろう。

→たしかに論理の問題ではあるのだけど、それだけではないかな。思いがけぬ事実を知ら

されて論理が破綻したとき、祖父の中から溢れてくる感情、そういったものにも着目して、もう少し考えてみよう。

27. 「きよちゃんが最後おじいちゃんの問いかけに答えなかった時のきよちゃんの気持ちはどうだったか」への回答

あれだけ戦死や、日本兵の孫がうたれたことを名誉のように言っていたのに、フィリピン人の兵士がうたれてしまうと、フィリピン人らしいと片付けてしまう祖父の偏見を偏見だとはっきりと感じたのだと思う。また、だからキヨちゃんは何も答えなかったのだと思った。

→するどいね。キヨちゃんの視点からは、それでいいと思う。では、偏見の持ち主とされている祖父の視点からも見てみよう。祖父の息子、つまりキヨや兄のお父さんは、話に一度も出てこなかったけれど、どうしてだと思う？ …そうだね、いないってということじゃないかな？ 理由は…想像付くよね、強制収容所からの志願の経緯や、戦死率の高さは、イントロで見たわけだから。息子の負傷の一報が届いた際、電話口に出た母の反応は、それで説明が付くね。

その観点から、祖父の勇ましい言動も再検討してみよう。若い頃に受けた軍国主義教育はそうそう抜けるものではない、という要素に加え、祖父たちは息子たちの死をそうまでして正当化する必要があったのだ。そういうことじゃないだろうか。しかし、命を捧げた「祖国」米国への彼らの思いもまた、単純なものではないはずだ。…こんなふうに、学部で見聞きした知識を総動員して、作品と向き合ってみよう。

そんな励ましをもって、一年の授業を締めくくった。

(4) 方法の評価—暫定的な結論を兼ねて

1章と同じように、「学生の問いの中から学生が選んで答える」という授業運営方法の利点（および欠点）をまとめてもよいのだが、本質的にはこの方法の評価は、(1) 前提の最後の質疑応答にあったように、卒業論文を含むアカデミック・ライティングの質向上にどのように寄与するかと深く関わるように思われる（前提で述べたように、筆者は語学力の向上は目的としていない。また、「文学講読を利用した英語教育の有効性」というようなシンポジウムにおいて、語学力とともに向上するかのように語られる「文学鑑賞力」の類いの概念¹⁶も信じてはいない）。従って、ここでは後者について述べる。

まず、科目の期末レポートを指標として挙げよう。2015年度後期の課題は次のようなものだった。

- ・扱った短編のうち、最も印象に残った一編と、その理由
- ・ちょっとした書評・紹介文のつもりで書いてみてください。

・おすすめポイントがわかり、かつ、内容もある程度はわかるように

しかし最高評価を得たレポートであっても、内容要約に留まるものがほとんどで、授業での「問い」と「回答」はあまり（または全く）盛り込まれていなかった。

そこで2016年度後期（やはり inquiry-based learning を行った）の期末レポートではこの反省を踏まえ、授業の特徴が生かせるように、課題に「問い」と「答え」を含めよという条件を追加した。また、「モデル」の提供が有効と考えられたため、筆者も寄稿したことがある金原瑞人氏主宰の書評フリーペーパー、*BOOKMARK*のURLを提供した。

・何らかのタイトルを付けること

・文中に「問い」と「答え」のセットを一つ以上含むこと

・短い書評・紹介文のお手本は、下記が参考になるでしょう。(PDF)

http://www.kanehara.jp/bookmark/backnumber/index_bn.htm

ここに載っているのが、それぞれ600字くらいです。

この年度に論じてもらった対象は、同じ教材に収録されている詩人ミツエ・ヤマダの短編小説“Mrs. Higashi Is Dead”である。この作品は日系一世の母と二世の娘との関係を描いており、小林富久子が言う日系アメリカ文学のプロットの一典型を示している。すなわち「娘たちに対して自己主張を抑える」日系一世の母親と、娘とが「互いに意思の疎通を図り、相互間の絆を打ち建てるには、何よりもまず、そうした沈黙を突き崩すことが先決になる」¹⁵のだ。母親の一分の間も無い洋装と、本人が娘や孫に与えようとした日本風の教育や躰とのギャップも、また見所である。

授業中には「娘の職場復帰と親の育児支援」という身近なジェンダーの視点から捉えた「問い」や「回答」が多かった。下のレポートの一番目も、モデルをうまく真似た良質な書評（「ネタバレ」も避けている）ではあるものの、その種のひとつである。しかし「言葉の多義性」を切り口にした二番目のレポートのように、論点を絞ることで、エスニシティの問題に切り込むことに成功したものも多く見られた。その意味では、レポートから指導法の有効性を実感することができた。

「母という立場、女性という性」 Nさん（現3年生）

他国へ嫁に行く、ということは普通の嫁入りより断然難しい。異国との文化、言葉、習慣、価値観など様々異なるし、たとえ何年その国に住んだとしても生まれ育った人たちのようにはなれない。単身海を渡っていった先で頼る人もおらず自力で家庭を支え、夫を支えた女性たちは相当、根性据わった人たちだったのだろう。

この作品では外国人の想像するような日本人らしい「大和撫子」はでてこない。むしろ勇ましい、ともいえる強い日本人女性が主役だ。主人公は日系二世であり、日本にも滞在経験はあるがあくまでも「アメリカ人」として描かれ、話の前半ではアメリカでの暮らしに触れ、途中からアメリカ人からみた日本への違和感を描いている。この作品はアメリカ

で発表され読者もアメリカ人を想定して書かれているはずだが、日本人が読むと作者が残した差異を感じることができる。

例えば、作中では二世の母、つまり一世の日本語でのセリフはあえて日本語で表現することで、訳してしまっただけでは感じることのできない違和感をそのまま残している。これにより主人公が感じている母とのズレを表現しながら、母と決して相容れない部分にモヤモヤしている主人公を感じることができるだろう。

また、母が主人公の子供たちと近い距離で接しつこいぐらい世話をやき続けている点にも着目したい。なぜ母は孫にそこまで構うのか？それは娘が感じている疑問でもあるし母が無意識にしていることでもある。

一世である母は孫たちの世話をすることで自分の居場所、自分の存在意義を見出している。娘だと、きちんと育てなくてはならない責任もあるが孫たちなら可愛がれるし、娘にも恩を売っているという立ち位置にいる。そう考えると母はしたたかなのかもしれないし、本当に孫たちを可愛がっているのかもしれない。それは読み手によって見方が違うだろう。

母と娘の関係、娘と子供たちの関係は作中でたくさん描かれているので、もしあなたが女性なら母親とのギクシャクした一時を思い出すかもしれない。男性なら嫁と姑の様子を垣間見れるかも。日常的な一場面が異文化の発見のきっかけになると思うと読んでいて更なる発見があるかもしれない。

「1世と2世の葛藤」 Fさん（現3年生）

Akikoは2世であり、結婚して3人の子供を育てながら職についている大学院出身のキャリアウーマンである。未亡人となった1世の母と暮らして5年になる。家事や育児を母に手伝ってもらっている。母と接する時間が多くなるにつれ、母娘の間に1世の日本的価値観と2世のアメリカ的価値観の間で意見の食い違いが出てくる。物語はこの母娘の間の摩擦を描く。成長するにつれて考えることをほとんど英語で行うようになっていたAkikoは、複雑な考えを日本語で上手く表現することができず、それを英語で母に伝えても、母は理解ができない。母も英語が苦手で、日本語でAkikoに伝えても上手く伝わらない。そんなことからAkikoと母の意識のズレが起こる。物語の中で、「はじ」や「じゃま」といった日本語が母のセリフとして出てくるが、この日本語は日本人的な価値観を表す言葉だと思う。母娘の価値観の違いとして、Mrs. Higashiという女性の話が出てくる。彼女は日系1世の女性で夫に先立たれた後、女手ひとつで6人の子供を育てていたが、生活が苦しく、子供を道連れに無理心中する。母はこの選択を日本語で「えらかった」と言ったが、日本語の複雑なところを理解できないAkikoは、それが“Life was hard”なのか“Life was noble”なのかわからなかった。しかし、言語の壁だけでなく、Mrs. Higashiの死についてのAkikoと母の意見は、1世と2世の価値観の大きな違いを表している。母は誰の助けも借りずに、1人で働き、子育てをし、他人の「じゃま」をして「はじ」をかくことより、死を選んだ

Mrs. Higashiの生き方を「えらい」と感じている。しかし、自殺は罪であるというキリスト教的教育を受けてきたAkikoにとってMrs. Higashiの行為が“noble”であるという感覚はなく、Mrs. Higashiは自らの意志で命を絶ったのであり、誰かに助けを求めて生き抜くという努力をせず、子供達の命まで奪ったMrs. Higashiの行為こそが「はじ」であると感じたのだろう。価値観の違いから一緒に暮らしていくことがよくないと感じた母は家を出ることを決意する。最後に母が娘に対して日本語で「覚悟したよ」と言うが、母は何故そんな言い方をしたのか。それは、母が娘との価値観の違いを感じ、今まで娘のために家事や育児において自分がしてきた行為は、娘にとっては「じゃま」だったのではと感じ、1人で生活していく「覚悟」を決めたということを経験したのだろう。しかし、この日本的な母の考えが娘に伝わっているかはわからない。この物語は日本的価値観を伝えていきたいと思う1世と、アメリカで生活していく中でアメリカ的価値観に染まっている2世の葛藤を描いている。

もうひとつの指標は卒業論文だが、こちらが問題である。2016年度に筆者のゼミで論文を書いた8名のうち、6名が2015年度に筆者の演習を受講していた。したがって卒業論文の出来と演習との間に、ある程度の相関が考えられるのだが、その出来はかなり低調であった。「SからCまでが合格、Dが不合格」という評価基準の中で、副査教員からC・D以外の評価を得られた学生は8名のうち1名しかいなかった。しかも、副査から指摘された問題点は「断片性」と「恣意性」に関わるものが多く、まさに演習の方法の一面を反映しているように、筆者には思われたのである。指摘された主な問題点は以下の通りである。

- ・典拠の示し方がなっていない
- ・議論が短い
- ・各章間の構成に問題（横並びになりがち）
- ・問題が提示されるが、答えが示されない
- ・筆者の問題意識に基づく所感や願望が、前後の記述との整合性なく、唐突に述べられる
- ・テーマの設定が恣意的
- ・作品の細部の分類に終始している。当該作家の創作原理や、そのジャンルの歴史における当該作品の意義などに議論が及んでいない
- ・作品を社会問題の反映と見るのは安直
- ・複数の作品を採り上げているが、作品の選択が恣意的

四番目の指摘などは、「質問者自身が答えられなくても、知的共同体からいい回答を導き出」せばよいと筆者が述べたことの悪影響にすら見える。しかし inquiry-based learning

が論文指導に無効であるとは筆者は考えておらず、解決策もまた「問い」の中にあるのではないかと考えている。

多様な着眼点を引き出すことは既にできており、自発的な調査を促すこともできている。もとより、日常的に文章を打ち込んでいる学生たちの描写力は、総じて十分に高い。そこで、今度は「継続的な議論」を授業内でシミュレートするために

- ・(プロンコが「事実に関する問い」「意味に関する問い」を切り分けさせているのに倣って) 提出された「問い」の整序や分類を行わせる
- ・(同じく「議論のための問い」の糸口として) テキストに対してではなく、テキストから生成された学生のコメントに対して、問いを発させる
- ・さらに、その問いに対して回答させる

このような新たな方法を、自身のゼミとの連携を取りつつ、試行してみたい。取り組みはまだ道半ばであり、(1) 前提で「inquiry-based learningの導入段階において最終段階に当たる(はずの)」と書いたのは、そういう意味である。

-
- 1 山本岩夫・松原美恵・小林茂 編注、*Six Short Stories by Japanese American Writers*、音羽書房鶴見書店、1992年。語学教材に留まらず、日系アメリカ人作家の再評価が始まった初期の選集として米国でも認知されている。
 - 2 担当初年度であった前年度には、『ハックルベリー・フィンの冒険』や『アンクル・トムの小屋』を知っていることを前提に、Ishmael Reedの英文エッセイをパラグラフごとに要約させ議論させようとしたが、本文2.と3.の事情により、受講者の大半にはちんぷんかんぷんとなってしまった。
 - 3 音楽美学者・増田聡が、人文学の役割としてこのように主張した。横浜都市文化ラボ2016年度特別セミナー「文系学部解体-大学の未来」第4回ゲスト講演会「大学はこのままでいいのか? -自由と多様性を求めて」日比嘉高、増田聡、司会:室井尚、2016年11月22日、横浜国立大学。増田聡ツイッター 2016年11月24日にも一部載録。
 - 4 “Teaching American Literature in English” Fuyuhiko Sekido (司会・発表), Michael Pronko, Akiyoshi Suzuki 第54回日本アメリカ文学会全国大会、2015年10月11日、京都大学
 - 5 「黄色い地に黒い縞々」の表紙が付いた、CliffsNotesスタディガイド。1958年に発行が始まり、世界の文学作品を対象に制作され、現在カタログに残っているものだけで300冊以上に上る。現在Houghton Mifflin Harcourt刊。
 - 6 Michael J. Marquardt, *Leading with Questions: How Leaders Find the Right Solutions by Knowing What to Ask, 2nd edition*, San Francisco: Jossey Bass, 2014. 本書はaction learningの方法を解説している。アクション・ラーニングとは企業マネジメント・人材開発の方法であり、部門リーダーがグループメンバーの意見を結集して業務上の課題解決にあたるようなリーダーシップの養成法である。Problem-based learningとは、方法論および目標において重なる部分を持つと見られる。他

方、名称の類似したアクティブ・ラーニングは教育学の方法で、個々の学習者の経験に注目する、教師以外に学生の中にリーダーを置くことは想定しないなどの点で、アクション・ラーニングと同義ではない。

- 7 序論で述べたように、バーナード・マラマッドの単行本未収録短編集をテキストとし、講読を行った。中には自己韜晦や欺瞞の多い「信頼できない語り手」による語りもあり、これも「問い」を発見する訓練になったと思われる。授業での一連の問いと回答はひとつの作家論を構成する水準にあったと筆者は考えており、本稿に続けてお目につけられる可能性がある。
- 8 1921年カリフォルニア生まれの日系二世。UCバークレー在学中に強制収容される。スミス大学大学院で教育学を修めた後、児童文学作家として世に出る。1992年没。邦訳に、小説『トパーズへの旅 日系少女ユキの物語』柴田寛二訳、評論社文庫、1983年（原著1971）がある。経歴については、オンライン百科事典Densho Encyclopedia <http://encyclopedia.densho.org/> のYoshiko Uchidaの項（Brian Niiya 著）に詳しく、上記もその項を参照している。非営利団体densho（伝承）は日系アメリカ人歴史資料の包括的収集と発信に携わっている最有力の団体の一つ。
- 9 写真花嫁たち本人の苦悩に思いを寄せる必要があるのは言うまでもないが、他方で池野みさおが指摘するように、1910年代当時に白人社会から浴びせられた「非文明的」「野蛮」との批判が、日系社会が再生産され定着することを忌避する白人側の感情にも動機づけられていた点も見なければならない。ウチダの代表作のひとつとされる長編小説*Picture Bride*（1987）は、花嫁たちの苦悩を扱っているが、全体としては彼女たちが「トラウマ的な出来事に直面しつつ、いかにしてそれを乗り越えて日系社会の基盤を築いていったのかを示し」（p.212）ているという。池野「写真花嫁のトラウマ―日系アメリカ人一世の女性像」pp.202-218（小林富久子監修『憑依する過去 アジア系アメリカ文学におけるトラウマ・記憶・再生』金星堂、2014年所収）
- 10 プロンコはタイトルの意味を問う問いを、凡庸で駄目な問いの典型例として挙げ、その凡庸さは学生自身が活動を通じて経験的に理解すべきものとした。
- 11 桜原美恵「母のつぶやき ―ワカコ・ヤマウチの短編に見られるセクシュアリティを巡って―」pp.244-45 アジア系アメリカ文学研究会編『アジア系アメリカ文学―記憶と創造―』大阪教育図書、2001年所収
- 12 Rie Makino, “Absent Presence as a Nonprotest Narrative: Internment, Interethnicity, and Christianity in Hisaye Yamamoto’s ‘The Eskimo Connection’”, *The Japanese Journal of American Studies* No.26, 2015, pp.99-120. “absent presence”は、先住民の理論家ジェラルド・ヴィゼナー『逃亡者のふり―ネイティヴ・アメリカンの存在と不在の光景』（大島由起子訳、開文社、2002年、原著1998年）の用語を引用している。
- 13 キンコック・チャン『アジア系女性作家論 沈黙の声を聴く』和泉邦子・小松恭代・中根久代訳、彩流社、2015年（原著1993年）、pp.59-61
- 14 ハワイ大学マノア校名誉教授（図書館学・情報科学）。project-basedおよびinquiry-based approachに基づくK-12（小中高）の読書指導を指南した多数の著書・論文・啓発活動で知られている。

創作としては、ハワイの季刊文芸誌 *Bamboo Ridge* の第14号（1982年春）に掲載された本作（のちに E. Chock & D. Lum eds., *Best of Bamboo Ridge*, Honolulu: Bamboo Ridge Press, 1986 にも収録された）が代表作のようだ。業績には他に日系アメリカ人強制収容所の資料集、アジア系アメリカ人の歴史を扱った教科書、ヨシコ・ウチダの研究論文や日本民話の研究も含まれている。

- 15 加藤幹郎『映画ジャンル論 ハリウッド映画史の多様な芸術主義』文遊社、2016年、pp.33-45
- 16 たとえば Louise M. Rosenblatt, *The Reader, the Text, the Poem: the Transactional Theory of the Literary Work*, Carbondale & Edwardsville: Southern Illinois University Press, 1978. 読者反応理論の先駆者とされ、このような場で今なお参照される Rosenblatt の「持ち出し可能な読み」「美学的な読み」「交渉」といった概念は、筆者には、読みの多様性を標榜しつつニュークリティシズムのテキスト内在主義を温存しようとした苦心のキメラに見える。筆者は「持ち出し可能」なメッセージや情報にも読者の関心が反映されると考えるから、inquiry-based approach を採用している。
- 17 小林富久子『ジェンダーとエスニシティで読むアメリカ女性作家 周縁から境界へ』學藝書林、2006年、pp.160-61

Letting Students Ask and Answer the Questions: A Look at Two Types of Inquiry-based Literature Classrooms (Part 2)

Shinji Yonezuka

Abstract

This essay discusses the advantages of using Inquiry-based Learning (IBL) in Literature classrooms. Following the previous part, which argued the merit of combining Inquiry-based Learning with the traditional lecture-based approach, this part provides a method where students ask questions and then choose and answer them. It also discusses how teachers can support them by presenting model questions and evaluating the questions and answers. An apparent limit of this autonomous method in terms of teaching academic writing, is also shown, along with possible tips for overcoming the limit.

Keywords: Inquiry-based Learning, Problem-based Learning, Teaching Literature, Asian-American Literature, Japanese-American Literature

(IBL、問題解決型学習、文学教育、アジア系アメリカ文学、日系アメリカ文学)

